

心を打ち、人生を根底から変えてしまう言葉に出会ったことがあるでしょうか。約2000年前、教会の誕生と共に語られ始めたのは、そのような言葉でした。今聴いている《説教》です。

《説教》と聞くと、身構えるかも知れません。叱られるイメージがあるからです。しかし、説教本来の意味は、何かを説き明かし、教え導くことにあります。教会の説教は、イエス・キリストを説き明かし、イエス・キリストと出合わせ、まことの自由へと解き放つ言葉です。

約2000年前、聖霊が降り、教会は語り始めました。「どうか、この事を知っていただきたい。わたしの言うことに耳を傾けていただきたい。」(14節)ペテロは語らずにはいられませんでした。聖霊のお働きによって、はっきりと分かったことがあったからです。自分こそがキリストを十字架につけた罪人であるということ。しかし神は、キリストを死から復活させ、罪を赦し、永遠の命を与えてくださったということ。それらを知り、信じるやいなや、心に恵みが満ちてきて、語らずにはいられなくなりました。

ペテロは「11人の者と共に立ち上がり」(14節)ました。ペテロを含めた12人は使徒と呼ばれ、教会の土台となった人々です。説教は個人的な意見ではありません。聖霊によって与えられた教会共通の言葉であり、教会が約2000年間、変わることなく宣べ伝えてきた言葉です。世界中の人々の心に染み入り、言語や文化が異なるままで、世界を一つにしてきました。

聖霊が降り、人々が様々な国の言語で話し始めた時、エルサレムに集まっていたのは旧約聖書に精通するユダヤ人たちでした。ペテロは、彼らをイエス・キリストへ導くために、旧約聖書を引用しながら説き明かしました。

ペテロは言いました。神はキリストを遣わされた。しかし、「あなたがた」の罪が十字架につけて殺してしまったと。あなたの罪がイエスを十字架につけた。そう言われると反発を覚えるかもしれません。しかし、主イエスの死は、私たち一人一人に関係のあることです。

聖書が伝える罪は、法律的・道徳的な悪行ではありません。《的外れ》という意味の言葉が使われます。神に創られた本来の姿から外れていること、私たちが創り、目的を持って生かして下さっている神に背を向け、自分が正しいと

思う方向に向かって生きていることです。

罪は、必ずしも悪行として表に現れるわけではありません。主イエスを十字架につけたのは、道徳的な人たちでした。不正に怒り、抑圧されている人のために戦っていた人もいました。罪はまた、無病息災、家内安全など、目指さなくてもいい方向を目指しては、それらを得られない惨めさや、それらを失う恐れに捕らわれるという仕方では現れることもあるでしょう。

礼拝で説教を聞き、主イエスが遠い歴史上の人物としてではなく、救い主として自分の人生に立ち現れる時、私たちの罪はあらわになります。私たちが救うために来てくださった主イエスを受け入れられず、自分の道徳や正義、自分が立てた計画によって主イエスを締め出し、なきものにしているからです。

私たちは、神が遣わされたキリストを十字架につけました。しかし神は、そのキリストを復活させられました。復活したキリストは天に昇り、聖霊を注いでくださいました。キリストを通して聖霊を注いでくださったのは、愛する独り子を殺され、私たちに愛を拒絶された、あの父なる神でした。

ペテロは言いました。彼らは酒に酔っているのではない。神がキリストを通して聖霊を注いで下さっているのだ。あなた方が今目にしているのは、神の愛なのだ。私たちも今、目にしています。独り子の命を引きかえにしても、私たちの罪を赦し、御自身のもとに連れ戻し、自由へと解き放とうとする神の愛が、この礼拝において、降り注いでいます。

礼拝において、若者は幻を見、老人は夢を見るようになります。若者は、お金や健康、人並みの生活を求める儂い幸福感から解放され、終わりの日の幻を見て、神にある自分の命を神に向かって捧げるようになります。老人は、迫る死を見据えながらも、死の先にある甦りの朝を夢見て、生も死も神に委ねるようになります。

ペテロの時代から今日に至るまで、世界中の教会は説教し続けてきました。ここにいるあなたを、自由へと解き放つためです。「どうか、この事を知っていただきたい。わたしの言うことに耳を傾けていただきたい。」イエス・キリストは、あなたの救い主です。

(記 本庄侑子)